日本武道における「道」の一考察

ビットマン　ハイコ

はじめに

日本のさまざまな「道」が，今，世界中に広がりをみせている。数十年前から茶道，華道など，そしてとりわけ武道が国際的にたいへん人気を呼んでおり，また，これらをきっかけとして日本に興味を持ち，留学しようとする人々も少なくないように思われる。

その「道」の一つに真剣に取り組んでみると，それらの目的は，単に結果として示される成績だけを目的にしているのではなく，人格を完成することにつながり，修行はその手段であるということがだんだん分かってくる。一つの例として，武道の目的は，勝つことを目的にする西洋のスポーツ的感覚，あるいは護身術という目標を超えているように思われる。そうしたことが一つの魅力となり，世界中で「道」に関心が持たれるのであろう。

そこで，古くからさまざまな生活領域にみられ，伝承されている「道」，いわゆる諸「芸道」の文化に注目し，「道」という概念がどのような意味を持っているのか，どんな思想に基づいているのか，何に影響されているのか，どのような歴史的過程を経て今日まで残されてきたのか，などの観点から追究してみたい。

「道」の概念試論

「道」という概念は日本のさまざまな生活領域の中に規範的かつ多様な意味を与えている[1]。茶道や華道といった日本の伝統的な諸「芸」[2]を見ても，「道」の意味は領域によって異なるニュアンスを持ち，一般的で適切な定義を与えることは難しい。武道において「道」の概念を定めようとすると，「道」は各武道の世代を超えて代々伝承された技術・身体的また内面的（心・精神的・感覚的）な内容を含んでいることが分る。そしてこの道の内容は「教えの道」という形で，修行者に「進むべき修行の方向性」を示している。もっとも，これは，「道」という文字を儒教的な立場から解釈し，後世に付加されたものである。

ここでは参考のために，起源の文字を分析したいと思う。（図１を参照。）「道」の文

字は次のように分けることができる。つくりの「首」やへんの「しんにょう」。「首」は頭全体を意味し,「しんにょう」は十字路の略形と足の形を意味する。その元の文字は「頭を，ある方向に向けて歩くこと」という意味を表す。ただし，藤堂明保氏によると，それは先人が歩いて残してくれた道なのか，それとも今から開いていく道なのか，その点は文字の本来の意味の中にも含まれていない[3]。

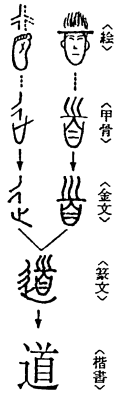


図１：「道」の文字起源
（藤堂明保（1977）『「武」の漢字「文」の漢字・その起原から思想へ』，徳間書店，p.99）

さて，先に述べた「道」の内容は，必ずしも全体的ではないが，一般的に教本や時には口授のなかに見られる。さらに，すべての「道」にはそれぞれに，直観的な伝承や習得, そして手本や師匠から直接に弟子に伝える特別な教え方や学び方が存在する。

指導者は，全面的な手本となる。そして，とくに「道」の本質的な内容を含む中心的もしくは唯一の練習方法である「型」の具体的な手本を示すことによって，弟子が進もうとする道を修得することに導びく役割がある。その際，西洋で一般的に行われる分析的ないし理性的な説明はされることがないか, あるいは僅かなところで止まる。それはなぜであろうか。「道」をマスターすることは超理性的なプロセスであり，おもに直観的な伝承そして自分自身の実践的な経験に基づくところに理由がある。つまり，弟子としては厳しい自己鍛錬のうちに具体的な手本を繰り返し見習うことによって，自分自身の実践の中から本質的な内容を先ずつかみ取り，自己の内面で育み，そしてその上に指導者の全面的な手本を参考にして,「道」を修得しなければならない。これらは，習得者の分析的あるいは理性的な質問や議論などだけでは実現することができず，直観的な伝承と習得が加えられて，初めて実現できるものである。例えば子どもが初めて自転車に乗る時, 親の分析的あるいは理性的な説明ももちろん大切であるが, 自分で手本を見ることや体験をすることが不可欠であるということに似ている[4]。

しかし，その教え方や学び方について，指導者は弟子に対して責任を持っている。弟子が「道」をどこまで進めるかというのは指導者にもかかっているからである。一方, 学ぶ者は初心段階では自分の創造的な努力を控えなくてはならない。というのは,

各武道の本質的な技術・身体的また内面的な内容が純粋に身に付くまでは，それらは守られなければならない。道を求める人がその本質的な内容を身につけて，その上ではじめて自分自身の人間性を導入することが可能になる。即ち自分に合った変形を加えたり，自分なりの創造について考えることができる。この段階に達すると，修行者は自己のあらたな工夫や創造が普遍的な価値を持つかどうかを判断する能力がついていると見なされる[5]。修行がより進んだ段階に至ると，「道」は技術・身体的または内面的に成熟した修行者に対して，口伝や秘伝といった最後の教えを受けさせ，自分の自由を回復する。この自由はかつて自分が持っていた小さい恣意的な自由よりははるかに大きく，自己からの真の自由である[6]。

武道の最も古い語意の用い方としては武芸という言葉が『日本書紀』の「容貌魁偉，武芸人に過ぐ」や『続日本紀』に「武芸を教習」したという形で出てくる。二木氏によると，「いわゆる武芸や軍事的な技芸を意味していた」[7]。そのような初期の伝統的な日本の諸芸の特徴は，ひたすら技術的・身体的な技能に熟練することであったが，時がたつにつれて“自己からの解放”というインドや中国大陸を経て発案された思想から影響を受けて“道の意識”へと進展していったと考えられている。この道の意識の形成には，道教，陰陽説，仏教，そして日本古来の神道のほか，特に儒教や禅仏教からの刺激を受けている。武道の場合，戦国時代までに主に要求された技術的・身体的な技能だけの芸が，芸の道化へ発展したことには，比較的平和な徳川時代にその歴史的な背景があると見なすことができる。

上に述べた“自己”は仏教的な意味合いに受け取らなくてはならない。仏教では，自己にとらわれることは迷いと見なされる。禅では最もダイレクトな方法として，座禅という瞑想実践修行で，自己へのとらわれを突き破ろうと努める。その結果，悟りへの修行の中で，修行者の行動や思考に関する“自己幻想”の支配が次第に克服されていく。これに対して武道では“動きながらの実践修行”によって自己の克服が達成される。その自己の克服は，例えば「月のうつりが水の上にうつる」という格言が示すように，無意識のうちに技術が現れるための前提である。

禅の道と武の道が実践の練習はもとより内面的にも互いに密接に連係していることは，例えば，「剣禅一致」や「拳禅一致」という表現にも表れている。禅の練習であっても武道の練習であっても，修行者というのは完全な「空」の状態を追究すべきである。つまり「自己についての内面的な能力を徹底的に空疎にする」[8]状態に努力しなければならない。類似の言い方も含めて禅の書籍の中にしばしば見出される「教外別伝不立文字」という表現が明確に示すように，禅の悟りへの道は教訓によって伝えられたり，文字で表現されることによってだけでは可能にならない。それは心から心へと

伝えられる「以心伝心」，あるいは自分の実践修行，即ち自分に対する厳しい自己修行，そして瞑想によって初めて達成される。それゆえ，空手道の名人宮城長順は，その例として次のように強調している。

「道の妙諦は遥かに一般武道と相通ずる教外別伝不立文字の極致に於て会得せらる可きもの也」。[9]

このような武道における自己の無意識ないし意図的でないこと，また教え方や学び方には禅の思想からの明らかな影響を見ることができるであろう。武道でも直観的な伝承や実践的な経験が強調される。けれども武道は禅の中に含まれる“一領域”ではなく，“独自性”を保っている[10]。武道をマスターするために禅の修行方法はかならずしも必要とされるのではない。

しかしながら，武道は禅と同じくらいに儒教の影響も深く受けている。儒教の教育学は武道を教えたり習得したりする際に，手本を繰り返し見習うことの中に表れる。これは武士階級が文学的な教養を身につける際の漢籍[11]の講読や朗読にも示される。

また，儒教は日本の日常生活の中に倫理的・道徳的規範を刻んだだけではなく，今日に至るまで例えば五倫（君臣・父子・夫婦・長幼・朋友）や五常（仁・義・礼・智・信）の道徳が程度差はあれ，“道意識”のなかにも生き続けている。歴史上の武の世界を振り返ると，「勇」あるいは「忠」という道徳が時に悪用されたことがあったとしても，「仁」や「礼」のような道徳は今日まで武道練習の中に重要な役割を演じるだけではなく，武道修行ないしトレーニングの倫理的・道徳的な基本前提と見なされる。

まとめ

諸々の「道」，そして武道にとっては，一般に勝敗のような計ることのできる結果は優先的なことではなく，修行のプロセス自体がより大切なことである。どの武道でも同じであろうが，その一つに真剣に取り組んでみると，武道の本質とされる「心技体」の密接不可分な統一という課題に直面する。それぞれの「武道」の本来の目的は，ただスポーツ的な勝ち負けの成績だけを結果として求めるものでなく，その段階を越えて，人格の完成につながるものでなければならない。武道の修行は単なる力比べではない。技術や身体的な能力の向上，肉体的な鍛錬を目指すことだけでもない。心の能力，すなわち内面的，精神的にも向上した状態をつくりあげることである。結局，修行者は修行によって自分の人格を練り上げ，全体的な人間完成を目指す。そしてそれによって最後に極致の修行段階でその「道」をマスターすることによって自己を放つのであり，おそらく禅にも通じるような悟りの状態を得る。

【注　　釈】

1 ドイツの著名な日本学者Hammitzsch氏によると，本質的な「道」の概念は，「道」の文字以外にも，例えば「術」という文字にも使われている。Hammitzsch, Horst. “Zum Begriff 'Weg' im Rahmen der japanischen Künste”. NOAG 82 (1957), p. 6.

2 Hammitzsch氏は「芸」を次のように定義する：「芸は人間の人格を発展させる，ないしは自己完成へ接近させようとするすべての価値のあるもの」。Hammitzsch, Horst. “Zum Begriff 'Weg' im Rahmen der japanischen Künste”. NOAG 82 (1957), p. 5.

3 藤堂明保（1977）『「武」の漢字「文」の漢字・その起原から思想へ』，徳間書店，pp. 98-102を参照。

4 Friday, Karl F. “Kabala in motion: Kata and pattern practice in the traditional bugei”. Journal of Asian Martial Arts, 1995/4, pp. 29-30を参照。

5 Hammitzsch, Horst. “Zum Begriff 'Weg' im Rahmen der japanischen Künste”. NOAG 82 (1957), p. 11を参照。

6 上記に同じ， p. 14を参照。

7 二木謙一，入江康平，加藤寛（1994）『日本史小百科・武道』，東京堂出版，p. 10。

8 Dumoulin, Heinrich. Geschichte des Zen-Buddhismus. Band 1: Indien und China. Bern: Francke, 1985, p. 275.

9 宮城長順（1934）『唐手道概説』（手稿），p. 1。

10 Dumoulin, Heinrich. Geschichte des Zen-Buddhismus. Band 2: Japan. Bern: Franke, 1986, p. 255を参照。

11 四書や五経などである。

【参考文献】

今村嘉雄（1966）日本武道全集，人物往来社

大塚博紀（1970）『空手道第一巻』，大塚博紀最高師範後援会

相良享（1987／8）「日本の『道』」，『岩波書店・文学』，岩波書店，pp. 95-108。

藤堂明保（1977）『「武」の漢字「文」の漢字・その起原から思想へ』，徳間書店

中林信二（1987）『武道のすすめ』，中林信二先生遺作集刊行会

ビットマン　ハイコ（1997）「空手道の歴史と『教え』について」，『東北アジア体育・スポーツ史学会組織委員会，東北アジア体育・スポーツ史学会第２回大会抄録集』，東北アジア体育・スポーツ史学会組織委員会，pp. 439-449。

二木謙一，入江康平，加藤寛（1994）『日本史小百科・武道』，東京堂出版

富名腰義珍（1935）『空手道教範』，大倉廣文堂

摩文仁賢和，仲宗根源和（1938）『空手道入門（別名空手術教範）』，京文社書店

源了圓（1989）『型』，創文社

宮城長順（1934）『唐手道概説』，（手稿）

吉田豊（1966）『武道秘伝書』，徳間書店

Bittmann, Heiko. Karatedô - Der Weg der Leeren Hand. Meister der vier groβen Schulrichtungen und ihre Lehre. Biographien - Lehrschriften - Rezeption. Ludwigsburg und Kanazawa: Heiko Bittmann, 1999.

Dumoulin, Heinrich. Geschichte des Zen-Buddhismus. Band 1: Indien und China Bern: Francke, 1985.

Dumoulin, Heinrich. Geschichte des Zen-Buddhismus. Band 2: Japan. Bern: Franke, 1986.

Friday, Karl F. “Kabala in motion: Kata and pattern practice in the traditional bugei”. Journal of Asian Martial Arts, 1995／4, pp. 26-38.

Hammitzsch, Horst. “Zum Begriff 'Weg' im Rahmen der japanischen Künste”. NOAG 82 (1957), pp. 6-14.

The Term "Way" in the Japanese Ways of the Martial Arts

Heiko BITTMANN

ABSTRACT

The term 'way' - *dô* has a substantial and far-reaching meaning in many areas of Japanese life. According to the contemplated domain it shows different nuances in the various arts (*gei*). As a result of this, a terse and universally valid definition remains elusive. If we try to define the term 'way' for the martial arts, it embraces in this case the inner as well as the outer (physical, technique-based) content of the respective martial art - which is created and transmitted over generations - and through this content affects a directive in the sense of a 'teaching-way' for the practitioner.

In all so-called 'way-arts' there exists a special inherited art of teaching and learning of the content through a model and a largely intuitive transmission, which is appropriated via the teacher directly to the disciple.

The characteristic of the traditional Japanese way-arts was, in the beginning, the pure outer skill, but 'liberation from the Self' shows the influence of continental ideas over time, developing a 'way-awareness', which obviously includes the outer skill. Besides Taoism, the Yin-Yang doctrine, Buddhism, and the native Shintô, this way-awareness received its formulative stimulus through Confucianism and Zen Buddhism.

The 'way' in general, as well as that of the martial arts, consequently does not place priority on the results of a measurable achievement - like victory or defeat - but rather on the learning-process in itself. For the Ways of the Martial Arts this means that not only the appropriation of outer abilities or pure physical and technique-based skills are important, but also the development of the abilities of the 'heart', in other words, the inner, spiritual and intellectual phenomena. For this reason, the masters repeatedly place particular emphasis on the inseparable unity of the components "heart, technique, and body"(*shin gi tai*). This is imperative if one is willing to delve beyond the mere strong-arm competitive elements into the deeper essence of the Way of Martial Arts. The practitioner of the 'way' should, through his discipline, develop his own character and strive for an all-embracing perfection, to release at last, in the highest level, through the mastering of a way-art, his 'Self', in other words, enter into a kind of enlightenment state, probably comparable to that of Zen.